

司書職採用合格体験記

文学部 文学科 文芸メディア専攻 4年

M.I

はじめに

私は今年度、公立図書館の司書職に採用されました。私は司書職のほか、市職員・県職員の就職活動も並行して行っていたため、それらの経験を踏まえた上で本体験記を執筆することにしました。司書職の受験を迷っている方や、地方上級職との併願を考えている方の参考になれば幸いです。

受験にあたって

司書になりたい気持ちはあるものの、倍率の高さや募集の少なさから受験をためらう方は多いと思います。そこで、ここでは私が改めて司書職を目指すきっかけとなった出来事を、2つご紹介します。

1つ目は、図書館実習です。私は漠然と司書になりたいと考えてはいたものの、具体的にどのような仕事がしたいのかまでは明確になっていませんでした。しかし、3年次に県立図書館で図書館実習をさせていただいたことで、図書館の実際の運営方法や、職員の方々の仕事に対する姿勢を知ることができ、自分がやりたいことがはっきりしました。これまで司書課程で学んできた内容の振り返りにもなるため、ぜひ図書館実習には参加してほしいと思います。

2つ目は、図書館総合展への来場です。図書館総合展とは、年に一度開催される、図書館をテーマとした展覧会です。無料で入場することができます。図書館の最新動向を知ることができる良い機会となりました。これは司書職志望者に限らず、図書館に関わる仕事を志望する方にぜひ参加してほしいイベントです。会場には図書館だけでなく、図書館に関わる企業も数多く出展しており、私はこの展示会を通して、図書館に関わる仕事は司書だけでは

ないということを改めて実感しました。併願先に迷っている場合には、図書館関連企業を選択肢に入れるのも一つの方法だと思います。

受験数とスケジュール

私が受験したのは、市職員、県職員、国立国会図書館（司書）、埼玉県（司書）、京都府（司書）、東京都（司書）の計6つです。

正規の司書職を第一志望としていましたが、倍率の高さや募集の少なさに不安を感じていました。そこで、県職員として図書館で働く道も視野に入れ、司書職と併せて地方上級職も受験することにしました。両方の対策は3年次の5月から開始しました。さらに滑り止めとして市職員試験も受験することにし、SPI対策も行いました。

大まかな流れとしては、3年次の5月から地方上級職の教養試験・専門試験、司書職の専門試験、市職員の教養試験の対策を同時並行で進めました。4年次の6月から採用試験が始まり、8月に市職員の内定をいただき、その後司書職の試験を受験し、11月に公立図書館から内定をいただきました。

地方上級職を併願するメリットは、教養試験対策を十分に行える点です。地方上級職と司書職を並行して受験したい方にとっては好条件だと思います。ただし、近年は司書職採用試験において専門試験のみを課す自治体も増えているため、事前に各自治体の試験方式を確認しておく必要があります。私は教養試験の得点で専門試験を補うことを想定していたため、あえて教養試験のある自治体を受験しました。実際、専門試験のみの自治体よりも、教養試験がある自治体の方が一次試験は通過しやすいと感じました。

一方でデメリットは、すべての勉強が中途半端になってしまう可能性があることです。市職員のSPI対策はそれほど時間を要しませんでした。県職員の専門試験対策には沢山時間がかかりました。教養試験対策は司書職の勉強にも活かすことができたため後悔はありませんが、県職員の専門試験対策に比重を置いた結果、司書職の専門試験対策が不十分になってしまったと感じています。早めに対策を始める、もしくは効率的に勉強する工夫が必要だと思います。

教養試験

地方上級職受験のため、公務員向けの通信講座を受講していました。教養試験は地方上級職と司書職で大きな違いがないため、司書職試験のための特別な対策は行っていません。地方上級職の試験対策をしていれば十分対応できると思います。私は数的処理が苦手だったため、3年次は数的処理に多くの時間を割きました。

教養試験は時間と正確さが求められるため、常に時間を計りながら演習を行っていました。

専門試験

司書職の専門試験対策は3年次の5月から少しずつ進め、4年次の4月から本格的に取り組みました。使用した教材は『司書もん』3冊と、『検索スキルをみがく 第3版 検索技術者検定3級 公式テキスト』です。まず全体を一通り読み、出てきた用語をコトバンクの『図書館情報学用語辞典 第5版』で一つずつ調べました。最初は分からないことが多かったですが、繰り返し読むことで少しずつ理解できるようになりました。

また、「司書職採用試験対策のための勉強会」にも参加しました。明治大学の司書課程・司書教諭課程で開催されている勉強会で、現役の司書の方が解説してくださいます。

面接試験

面接対策で特に力を入れたのは、自己分析と、受験先の図書館の活動を把握することの2点です。

自己分析では、「なぜ司書を目指すのか」「そ

のきっかけは何か」「司書として何をしたいのか」という3点を明確にしました。これらを整理することで自分の軸が定まり、一貫した受け答えができるようになりました。また、受験する自治体が求める人物像と自分を照らし合わせ、それに沿ったエピソードを複数用意して面接に臨みました。

図書館の活動については、ホームページを確認するだけでなく、実際に図書館を訪問することを強くおすすめします。その地域や自治体の雰囲気を実際に見ることで、そこで働くイメージが持ちやすくなるからです。訪問時には、来館者数や年齢層、検索機の使いやすさ、展示内容、蔵書の傾向などを確認し、併せて改善点を考えるようにしました。

自分のやりたいことを明確に伝えるためにも、その図書館の運営方針を把握しておくことが重要です。図書館のホームページだけでなく、教育委員会や図書館協議会のホームページにも目を通しました。

これまでに記入した面接カードの内容は、「志望理由」「これまで力を入れて取り組んだこと」「採用後にやってみたいこと」などです。面接カードをもとに面接が進みます。事前に質問が用意されていてそれに答える一問一答形式の場合もあれば、受験者の回答に対して深掘り質問をされる場合もありました。

面接では、できるだけ笑顔で、はきはきと話すことを心がけました。前向きな姿勢を示すことが大切だと思います。

おわりに

周囲が次々と就職活動を終えていく中で、最後まで努力を続けるのは本当に大変なことだと思います。どうか周りとは比べすぎず、自分のペースを大切に頑張ってください。私は日々生まれる不安を解消するため、歴代の先輩方の合格体験記を定期的に読み返し、司書になりたいという気持ちを奮い立たせていました。狭き門ではありますが、きちんと取り組めば、その分結果につながる試験です。皆さまに良い結果が訪れることを心から祈っています。

司書職採用試験受験体験記

2018年度 司書講習修了生

F.T

はじめに

私は明治大学とは別の大学を卒業後、出版社や、図書館受託運営業務等を行う民間企業で働き、後者に在籍中に明治大学の司書講習で司書資格を取得しました。20代後半に非正規雇用の図書館員として2年間働くなかで、司書の仕事にもっと深く携わりたいと思ったものの、非正規雇用の経済的な厳しさや、正規雇用の司書の就職の難しさ等を鑑みて、再び出版社で正社員として6年ほど勤務しました。諦めかけた時もありましたが、残りの職業人生の「働く目的」を考え直した結果、「経済状況にかかわらず誰もが自由に本が読めて学べる環境づくりに貢献したい」という思いが増し、心が決まりました。

それからは働きながら勉強を続け、令和7年度に正規職員の採用試験で第一志望の県立図書館に合格しました。計13年間ほど民間企業で働き、30代半ばでの転職となりました。

採用試験の内容

私は公立図書館志望だったため、自治体が行う公務員試験の司書の職種を受験しました。

一次の筆記試験は自治体ごとに異なり、教養試験+専門試験+論文試験すべてを1日で行う自治体もあれば、教養試験か専門試験どちらかだけ、という自治体もありました。私はどのパターンでも選考に通過できるように勉強を続けました。

二次は、個人面接と適性検査で、面接は1～2回でした。私の場合は、本当にその自治体で働きたい、こういう仕事がやりたい、という思いがないところは気持ちが入らず、面接を通過できませんでした。練習のためにも幾つか受けながら、志望度の高いところに注力す

るのも1つの方法です。司書はたくさん受けたほうが良いとよく言いますが、特に在職中は時間も限られるので、自分の納得のいくやり方で進めるのが良いと思います。

筆記試験

仕事を続けながら自分のペースで勉強したかったため、予備校には通わず、市販の参考書を使って勉強しました。

〈教養試験〉

教養試験の勉強には、主に実務教育出版の『公務員試験 新スーパー過去問ゼミ』シリーズを使いました。数的推理と判断推理については、初心者向けの丁寧な解説がある参考書を最初に1冊やってから、この過去問集に移りました。数的推理は3～4周、その他はひと通り1周して、試験直前は頻出分野に絞って勉強しました。

働きながらの勉強は、時間の使い方が大事です。数的推理等の知能を問う問題は手を動かして解くので、机に向かう時間のある土日や仕事後の夜に取り組み、知識を問う問題は暗記なので、通勤時間や昼休みの時間を活用しました。

本番の試験では、解く順番を決めておくのもおすすめです。私は最初に焦らず確実に得点源にしたい分野から始めて、最後は時間が足りなくなっても調整の効く分野にするため、資料解釈→数的推理→判断推理→知識問題→文章理解という順番で解いていました。

〈専門試験〉

専門試験の勉強には、後藤敏行 著『司書もん』（図書館情報メディア研究会）全3巻を使

いました。下線を引いたり、自分で調べたりした詳しい情報・解説・参照先を書き加え、知識を繋げて理解するようにしました。特に図書館法や著作権法、地方自治法等の法改正には注意し、最新の情報を調べて書き加えていました。最後の試験までに5周はしたと思います。

また、関係法令・用語等の資料集として、今まど子・小山憲司 編著『図書館情報学基礎資料』（樹村房）も手元に置いて、確認に使っていました。

面接試験

面接カードの時点でしっかり自己PRをし、その内容に一貫性をもたせることで、本番の受け答えがしやすくなりました。

他業種からの転職の場合、現職の業務をそっくりそのまま使えるわけではありませんが、一旦それを抽象化して、ポータブルスキルとして言語化してから、それを活かせる司書の仕事に当てはめて、どのように活かせるか具体化する、ということを考えました。それを考える際に、現役の司書の方のお話を聞いたことが役に立ちました。私が合格した県では、希望の職種の方の方に直接お話を聞ける機会を提供していたため、試験の前に申し込み、具体的な仕事内容等をお聞きできました。

他にも、明治大学図書館情報学研究会の例会等で司書の方や専門家の話を聞いたり、図書館や地方自治体に関するニュースをチェックしたりしていました。仕事をする上で大切にしていることや、目的・目標・それに向けて行動していること、といったことは言語化できるようにしていました。

明治大学図書館情報学研究会の「司書職採用試験対策のための勉強会」に参加した際に、講師の先生が「30歳を過ぎると年齢の分、求められる基準も変わる」と教えてくださいました。また、30代以降で大事なことの1つは、自分を客観視できているか、ということだと思いました。図書館関連の勉強だけでなく、定評のあるビジネス書を読んだり、目上の方の話を聞いたりすることで、気づきが得られることもあります。

おわりに

回り道をしても、人生を主体的に考えて決めれば、全ての経験が糧になると思います。この受験を通して、1歩ずつでも前に進めて継続することの効用として、自分にとっての「当たり前」を増やすことの大切さを実感しました。この経験を糧にして、司書として住民の方々に貢献できるように精進してまいります。この体験記の一部分だけでも、どなたかの参考になれば幸いです。

採用試験合格体験記

—公務員の選択肢としての司書職—

大学院 文学研究科臨床人間学専攻教育学専修 博士前期課程 2年

H.F

はじめに

私は、地方自治体の市役所採用試験に合格し、来年度より市役所の事務職員として勤務する予定です。大学院生の就職活動は、学部生と大きく変わりませんが、修士課程は2年間で修了となるため、入学直後から将来の進路を考える必要があり、よりスピード感を持って動くことが求められます。私自身の体験が、学部生・大学院生の皆さんの参考になればと思い、体験記を執筆しました。

図書館・司書職への関心

私は、小学生の頃から本が好きで、将来は本に関わる仕事に就きたいと漠然と思っていました。学部時代は歴史に関心があり考古学専攻を選択しましたが、幼い頃からの関心も変わらずあったため、学芸員資格に加えて司書資格も取得しました。

大学院で図書館情報学を専攻し、学びを深める中で就職の選択肢の1つとして司書職を意識するようになりました。また、民間企業の中にも図書館に関連する会社を調べ、情報収集も行っていました。

インターン参加と業界の選択

大学院修了後には就職をすると決めていたので、修士1年の5月頃から、マイナビやリクナビなどの就職活動サイトに登録しました。当初は、業界や職種を絞らず、興味を持った企業の説明会に参加するという形を取っていました。この段階では民間企業か公務員かも明確には決めていませんでした。

夏前からインターンの申し込みが始まりま

す。インターンを選ぶ際に重視したのは、①自分の興味・関心がある業界であるか、②企業や業界の社会的役割や事業の安定性が確保されているか、③これまで学んできた学問と関連しているか、の3点です。この軸に沿って、出版系・金融系・公務員に業界を絞り、それぞれ1日～5日程度のインターンに参加しました。

この中で、市役所のインターンにも参加し、様々な部署の方からお話を伺いました。司書の方から直接お話を聞きたい場合には、司書課程の選択科目の「図書館実習」を選ぶのも選択肢の1つです。私は学部3年時に参加し、実務のイメージを掴むことに加え、司書の方から意見をいただくことができました。

業界の絞り方は人それぞれですが、何を重視するのか自分なりの軸を持つことが重要だと思います。

就職活動の流れ

夏インターン終了後から就職活動終了までの流れは図1の通りです。

私は、民間企業8社、市役所3か所（司書以外の専門職1か所）、国立大学法人等職員（図書）の試験を受け、民間2社と市役所2か所から内定・合格をいただきました。

当初は民間企業を中心に就職活動を進めました。民間企業は、夏・冬インターンを経て本選考に進むことが多く、2月初旬から面談や試験を重ねました。4月になると、市役所でもエントリーが始まり、どちらに進むか定まっていなかった状態でしたが、選択肢を広げる意味で応募していました。少しでも迷っているな

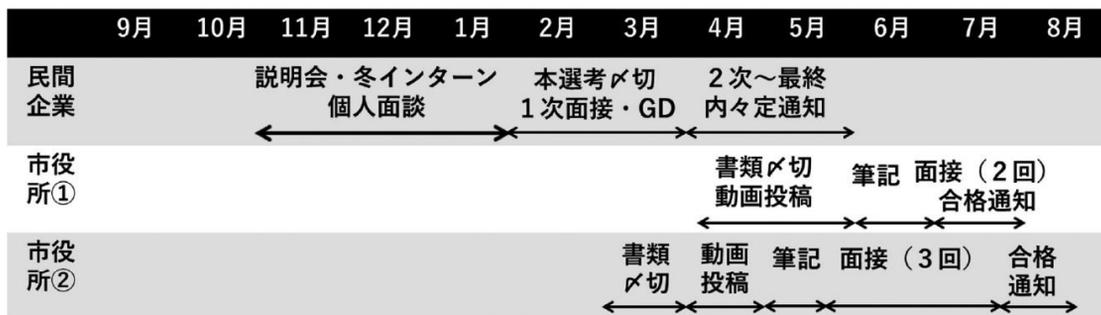


図1 就職活動の流れ

ら、応募しておくことをおすすめします。民間企業でのテストや面接の経験は、公務員試験にも役立つので、公務員志望の方も数社受けることをおすすめします。

5月末には民間企業の就職活動を終え、その後は市役所対策に専念しました。最終的には市役所に決めましたが、8月頃まで進路に悩んだので、すぐに決めずにじっくり考えるのもありだと思います。

試験対策

私が受験した市役所の試験は、動画投稿・書類選考・筆記試験・面接試験（個人・集団）でした。筆記試験は、自治体によっても異なりますが、埼玉県内の市役所ではSPIを採用しているところが多く、民間企業の選考で受験した際のデータを活用することも可能です。私自身は、SPI対策を行いませんでしたが、気になる方は書店等で対策本を購入するのもいいと思います。

また、公務員試験では、司書や学芸員といった専門職種で募集もありますが、数が限られているため、事務職を選択することも一つの方法です。市役所では数年単位で部署異動が行われ、図書館や博物館に配属される可能性もあります。遠回りにはなりますが、司書職に就ける可能性がある選択肢の一つです。

面接対策

民間・公務員を問わず、自分の意見をしっかり述べるのが重要です。志望動機などの

定型的な質問を暗記するよりも、要点のみを押さえ自分の言葉で話すことを意識しました。面接では時間制限を設けられることもあるので、時間を測りながら話す練習をしてみるのもいいかもしれません。また、面接前に面接カードを記入する場合は、内容を最終試験まで忘れずにいることが重要です。

面接や志望動機で司書職について言及する場合は、自治体のHPを確認し、実際に図書館を訪れて特徴を把握しておくのも良いと思います。また、電子書籍などの近年の動向についても理解しておくのが良いと思います。私自身は、指定管理者制度について意見を求められたことがありました。どのような質問が来るのか予測できないので、暗記よりも自分なりの軸を持って臨機応変に話すことができるように練習することをおすすめします。

おわりに

市役所の事務職で採用となりましたが、異動によっては司書職に就くチャンスもあります。司書への道は1つではないので自分に合うルートを選択してください。

司書職について悩んでいるのであれば、駿河台キャンパス19階の司書課程室を訪れてみてください。体験記や資料を読むことができ、職員やTAの方に相談することもできます。時間が合えば先生に直接相談できる機会もあります。皆さんが悔いの無い選択ができるように祈っております。